

本殿や拜殿の周りには素焼きの皿が捨てられていました。どれも粉々に割れていました。当時の人達は足元に打ち捨てられた皿をバリバリと踏み割りながらお参りしたので

は、幣物を挟んだ幣串、供物を入れた素焼きの皿、結界を張った注連縄、そして松明です。この道具一式が塩津港遺跡の神社から出土しているのです。陰陽道は神社などのような固定した施設をもっていない。しかし、陰陽道に近い

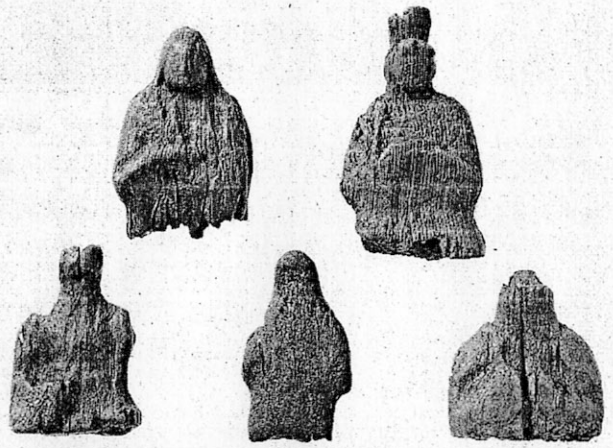
です。箸も大量に出土しています。「共食」という神様と一緒にに食事をして、神や人と人との繋がりや強めようとしたのでしょうか。このような様子は平安時代後期の絵巻物『年中行事』に見ることができません。巫女が神前で踊り、周りでは酒宴を開いています。神社の裏では、酔いつぶれて嘔吐している人までいます。

お父さんが腹痛を起こして三日も治らないので、神社で被ってもらおう、などということが盛んに行われていたのでしょうか。その塩津の神とはどのような神様だったのでしょうか。残念なことに、伝承は途絶えはつきりとは判りません。

ちようごこの頃は、陰陽道も盛んで、有名な陰陽師安倍晴明が活躍していました。陰陽道は占いや被えなどを行う方術のこと。陰陽師が邪鬼を払う「被え」の儀式の一場面が鎌倉時代の絵巻『春日権現験記絵』に描かれています。そこに描かれた被えの道具一式

しかし、手掛かりはありません。起請文木簡には世界の神様から日本の神様、近江の神

塩津港遺跡 2



塩津港遺跡の神像。高さ15センチほどの木造の小さな像で、御神体として大切に安置されていた

様、そして当郡の神様、当所の神様まで名前が記されていました。この神社の名前としては書かれていないので判断しにくいのですが、その中の「津大明神」「塩津五所大明神」などが有力な候補です。神「などが有力な候補です。ちなみに、五所とは神様が五神祀られている意味です。神様とは姿形がないもので、見たり触れたりしてはい

異なる。神像は扉を固く閉ざした神殿の中に安置され、人目に触れることはありません。神官でさえお仕えする神社の神像を一度も見たくとがないのが当たり前です。このことが災いして、雨漏りがあって腐り始めても、虫に喰われてひっくり返ってしまっても、だれも気付かず放置されてしまっています。例えば、

けないものとされています。しかし、仏教の影響もあり、平安時代になると神様の姿を表した神像が作られるようになります。御神体として神殿の中に安置されたのです。仏教の影響を受けたものとはいえ、仏像とは扱いが

建部大社の神像三体の足元が腐ってしまったのも雨漏りによって下から腐り上がってしまったためです。塩津港遺跡では神像が五体出土しました。五体出土したということは少なくとも神様が五神祀されていたということです。ここで先の「塩津五所大明神」の説がぐっと浮上してきます。

出土した神像はいずれも俗体というお姿で、当時の貴族の姿をしています。写真の上二体が男神像と女神像です。高さ15センチほどの小さなもので、二体とも足元が腐っていて建部大社のものと同じような状態になっています。男神像は左肩から雨漏りの滴を受けていた様子がわかります。女神像は足元から背中にかけて大きく腐っており、最後は神殿の中で仰向けにひっくり返っていたのでしょうか。祀られていた時に傷んでしまったのですが、そのことが逆にこの神像が神殿の中で大切に安置されていたことを示しているのです。

神像は人目に触れず安置

(財団法人滋賀県文化財保護協会 横田洋三)